

特に断らなければ  $\mathbf{u} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  とし, また  $\Omega$  は  $\mathbb{R}^2$  の領域とする.

1. (1)  $\mathbb{R}^2$  上のベクトル場  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} 5x^4 + 8x^3y - 9x^2y^2 + 10xy^3 - 2y^4 \\ 2x^4 - 6x^3y + 15x^2y^2 - 8xy^3 + 5y^4 \end{pmatrix}$  と,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t^2 \\ t^3 \end{pmatrix}$  ( $0 \leq t \leq 1$ ) で表される曲線に対し,  $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$  を定義通り計算せよ.

(2) (1) の  $\mathbf{V}$  に対し,  $\mathbf{V} = \text{grad}(f)$  となる関数  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$  をひとつ見つけよ. これを利用して  $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$  を計算せよ.

2. 次の領域  $\Omega$  上のベクトル場  $\mathbf{V}$  と,  $\mathbf{l}$  で表される  $\Omega$  上の曲線について,  $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$  を計算せよ.

(1)  $\Omega := \mathbb{R}^2$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} x^2 - y \\ y^2 - x \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t^2 \\ t^3 \end{pmatrix}$  ( $0 \leq t \leq 1$ )      (2)  $\Omega := \mathbb{R}^2$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} -\sin x \sin y \\ \cos x \cos y \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t \\ 3t \end{pmatrix}$  ( $|t| \leq \frac{\pi}{4}$ )

(3)  $\Omega := \mathbb{R}^2 - \{\mathbf{0}\}$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{2\mathbf{u}}{|\mathbf{u}|^2}$ ,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t-1 \\ 2t+1 \end{pmatrix}$  ( $|t| \leq 1$ )

(4)  $\Omega := \mathbb{R}^2 - \{\mathbf{0}\}$ ,  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \frac{1}{|\mathbf{u}|^4} \begin{pmatrix} y(y^2 - x^2) \\ x(x^2 - y^2) \end{pmatrix}$ ,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t \\ 1-t \end{pmatrix}$  ( $0 \leq t \leq 2$ )

3. (1)  $f: \Omega \rightarrow \mathbb{R}$  を  $\Omega$  上の  $C^\infty$  級関数とし,  $\mathbf{l}: [a, b] \rightarrow \Omega$  を曲線のパラメータで  $\mathbf{l}(a) = \mathbf{l}(b)$  をみたすものとする. このとき  $\int_I \text{grad}(f) \cdot d\mathbf{l} = 0$  を示せ.

(2)  $\mathbb{R}^2$  上のベクトル場  $\mathbf{V}(\mathbf{u}) := \begin{pmatrix} 2y \\ x \end{pmatrix}$  と  $\mathbf{l}: [0, 2\pi] \rightarrow \mathbb{R}^2$ ,  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} \cos t \\ \sin t \end{pmatrix}$  に対し,  $\int_I \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$  を計算せよ.

(3) (2) の  $\mathbf{V}$  に対し,  $\mathbf{V} = \text{grad}(f)$  となる  $C^\infty$  級関数  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$  は存在しないことを示せ.

4. (1)  $\mathbf{l}, \mathbf{m}$  を曲線のパラメータとすると,  $\frac{d(\mathbf{l} \cdot \mathbf{m})}{dt}(t) = \frac{d\mathbf{l}}{dt}(t) \cdot \mathbf{m}(t) + \mathbf{l}(t) \cdot \frac{d\mathbf{m}}{dt}(t)$  を示せ. ただし関数  $\mathbf{l} \cdot \mathbf{m}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  は  $(\mathbf{l} \cdot \mathbf{m})(t) := \mathbf{l}(t) \cdot \mathbf{m}(t)$  (右辺は  $\mathbb{R}^2$  の内積) で定める.

(2) 領域  $\Omega \subset \mathbb{R}^2$  内の物体  $P$  が,  $\mathbf{u} \in \Omega$  において力  $\mathbf{F}(\mathbf{u})$  を受けて運動しているとする.  $\mathbf{F} = -\text{grad}(f)$  であると仮定し, 時刻  $t$  における  $P$  の位置を  $\mathbf{p}(t)$  とおくと,  $E(t) := \frac{1}{2} \left| \frac{d\mathbf{p}}{dt}(t) \right|^2 + f(\mathbf{p}(t))$  を  $P$  のエネルギーとよぶ.  $E$  は時刻  $t$  によらず一定である, つまり  $\frac{dE}{dt} = 0$  であることを, 運動方程式  $\frac{d^2\mathbf{p}}{dt^2}(t) = \mathbf{F}(\mathbf{p}(t))$  が成立することを使って示せ. これをエネルギー保存則とよぶ.

(注. エネルギー保存則が  $\mathbf{F} = -\text{grad}(f)$  の仮定のもとで運動方程式から数学的に導かれる定理であること, またベクトル場  $\mathbf{F}$  のポテンシャルとは位置エネルギーであることがわかる)

5. 次のパラメータ  $\mathbf{l}: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2$  で表される曲線を図示せよ. これらは閉曲線を表すことを示し, 周期  $T$  を求めよ.

(1)  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} 2 \cos 3t \\ 3 \sin 3t \end{pmatrix}$       (2)  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} \cos t \\ \sin t \end{pmatrix} + \frac{1}{4} \begin{pmatrix} \cos 2t \\ \sin 2t \end{pmatrix}$

(3)  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} |t - 4n - 2| - 1 \\ |2 - |t - 4n - 1|| - 1 \end{pmatrix}$  (ただし  $n$  は  $4n \leq t < 4(n+1)$  をみたす整数)

(提出の必要はありません)

補足. 解析学 (微分積分学) のスタート地点は 1 変数関数  $f: \mathbb{R}^1 \rightarrow \mathbb{R}^1$  である, と思います. これを  $f: \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R}^n$  の形に一般化するのは自然なアイデアでしょう.  $(m, n) = (2, 1)$  の場合が 2 変数関数,  $m = n = 2$  の場合が  $\mathbb{R}^2$  上のベクトル場です. このように一般化するにあたり, 元の場合で重要だった概念 (今の場合, 微分  $f'$  や積分  $\int f(x) dx$  など) はどのように一般化すべきか, を考えるとき, 元の場合に成り立っていた重要な定理 (今の場合, 微分積分学の基本定理など) を指標として, これらが大体そのまま成り立つようにする, というのが正しい方法の一つです. このような観点で考えると, 5/18 の講義でやった補題 5.1 は, 勾配ベクトル場  $\text{grad}(f)$  や線積分が, 2 変数関数やベクトル場の「微分」「積分」として正統なものであることを示していると考えられます. 今回の問題 1, 2 のように計算の簡略化に使えるという側面もありますが, これはあくまで副産物です.

幾何入門レポート問題 5 (2018 年 5 月 18 日)

担当：境 圭一

$\mathbb{R}^2$  上のベクトル場  $\mathbf{V}\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} := \frac{1}{x^2 + y^2 + 1} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  と、パラメータ  $\mathbf{l}(t) := \begin{pmatrix} t^5 \\ \sin^3 t \end{pmatrix}$  ( $0 \leq t \leq 2\pi$ ) で表される曲線に対し、線積分  $\int_l \mathbf{V} \cdot d\mathbf{l}$  を計算せよ.

(5/25 の 3 限開始時まで提出してください)

[http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/18\\_geometry/18\\_geometry.html](http://math.shinshu-u.ac.jp/~ksakai/18_geometry/18_geometry.html)